

六
百
五
十
八

元大將家六百番款合卷中八目錄

憲

寄筆憲

寄琴憲

寄繪憲

寄衣憲

寄席憲

寄遊女憲

寄傀儡憲

寄海人憲

寄樵丈憲

寄商人憲



大將家六百番秋合巻才八の部
左 右 勝 家 隆
ひらり福と今を何ゆらびくさめんと
右 勝 家 隆
左 右 勝 家 隆



大將家六百番秋合巻才八の部

憲

一番

左 右 勝 家 隆

ひらり福と今を何ゆらびくさめんと

右 勝 家 隆

救りくを枕ふふけしゆき竹もゆりむら床小ゆり

右方一之た舞平懐也

一方中一云枕し一笛のふけし事の内もや

判云左方とるまの笛と吹るよぬやと云れなく吹やむ

もりんれとる向子期の隣人の笛ハ舊取思小賤と作ま

詞の中子隣人吹笛を拜寒亮とるをいる連と吹

やむゆへとさふとを吹やりの事れめやりのにすゆ
つくと新しを捨てるれし暇とを致もそつとよふとさ
お似ちるといふる勝

二番

右 持

互流朝臣

よそおとせりりれ笛とすあに我力のう人お新しう後をの
七 信宅

扱もそりうそおすけり笛の音りしとを神にうつりめり
七

左方より云た新しを歌り之号

一 左方より云笛の音り神にうつりし事いり

判云ぬふ力りいむ扱とのぬをれ新し受人をすめしけり

小うわゆる意れあくぬいづくもくの勝負に持とをむ

三番

左 勝

過宗お辰

ゆらぬふ力りいむ扱とのぬをれ新し受人をすめしけり

右

輝蓮

扱れと思もぬよそのゆこの音も藻よむ虫と神とゆれり

左方より云た新しを歌

判云たうき人ぬりとい人人のつとさに祿られりりり

うらうらやた下の藻よむ虫像に思ひつけをよりおむ

すゆらんうき人をもすあしすやとをまらえりりり

なくをゆへし仍左の勝なりぬくや

四番

厄 持

季禮つ

うゝやまーわりのところくと母の言を頼る中の人とさくじ
右 経家郷

うら竹の志ふうららんこしう愛一粒北畑一ふ高きうり建て
うら竹こちやま不甘い

別云胡竹うら竹回馬なりこし

五番

厄

定家朝臣

笛とものうら一うらと奏りまそりの振とのと現らやらふ

右 勝

中宮権大夫

う心くと波比分く新笛たきと我意つ下とたもそまうらう

心方一云厄舞一不歌一

たあ一云心舞一平懐也

別云心舞一うらの振とたて云取事ありは様もをさあし

まうらとらふお世異事一うら心方波ちふる母の言をそ

うら心方波ちふる母の言をそ

うら心方波ちふる母の言をそ

六番

左 勝

女房

笛たきの志ふうららんこしう愛一粒北畑一ふ高きうり建て

右

隠信朝臣

我意ハまこ吹がれぬよこ笛乃ねよたつ建とも毎うこもなり

た心方不歌一

別云心の振笛を下うらうらと心方波ちふる母の言をそ

きくしひらう志は速とありても是りのききしひらうは優
みみしゆりたの場とす人し

七番 寄琴意

左 持

多歌朝臣

若くはつてそれのしとるふまよとてまて祿もたてま

七

中宮権大夫

まはりころの心のひのぬ翠のねき我まつに社加よとさりたれ

た方ち云反寄極ありあや何事あり

たあち云石寄極あり

判云反寄極なる極あり一美歌より極初日本聖者より娘

子に化して云つふありむ日れを死より時を詳とるむ人

のひきりさる一我枕とんと云れ寄一のむよようゆめ連

又此寄りたにあややうふあや聖ゆり無由誌ありつとさ

おくしおとこむらひのぬこつひ我うつうようはく

ももへいるるむまに能あするを指ふとよや

八番

左

栗種つ

意つたあわらるるの翠れより逢しうとてき祿のを縁とぬ

右 膝

舞蓮

松岡にりふふとすしことこのねも物思小町を男あそしとまら

右方ち云ししのとつと云れむゆりす

たちち物思もきりきられたるハカう一肉ささるきれよや

判云反つふも潤子たうひてまらさゆり心も松岡にりうひ

小方ち一むと云る題ようむりすまらぬ心ぬ勝

九番

右

為宗親臣

あしぬまきしとちもを引しものす少くも通きしやなとん

右 勝

経家卿

松田も聖のちくへよりふりかひり祿をきりしもあるま

右方中一云石舞一ぬきふきりや

左中一云石舞一せ持取

判云石舞一因持取の番り左のかりなりしことこの

八 潤そことあしりき持りすもゆれとけのていなり

右一勝とてんくや

十番

右 勝

弘昭

あしきしとちり人をふれりもきりしもの祿より終を

右

隆信朝臣

なとさりいしりなくとさび聖きものわもき取小袖と松きけ

右方中一云石舞一せ持取

左方中一云石舞一せ持取

判云右方中聖せり一優れし思ゆりしとわてたも下句よ

ろ一石も上下句よろしあふ似ちし仍い左る勝

十一番

右 持

女房

あゆ人もさきことこのねきたてし子と思ふ鶴よりよふは

右

お盛

よそ小なる人ふつことこのあし子とちも持も心し

左心不極

判云左心不極

牙回の弦を冷くするに教給懐子終中時と云れし

うりまのせし七弦の琴をわくされとも是も琴の類

なりし家琴といはん類と和琴筆指何事在也但可也

考勝負可ぬ指也

十一番

左 勝

左 家朝臣

左心不極一人を指小段をてくししの終よのしりふ松り候

右

信定

さう一いつれなき人のしとれ音小つともす返向松り候

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

左心不極一人を指小段をてくししの終よのしりふ松り候

判云左心不極一人の段を指するにハハもあふ事なれと

うをわく事もかやう小まも為例なり人にすまふ

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

心方一云指一人にたゆむ指よき心也

右方中一云心弁一云歌中一云

木判ま石不意慕る踏舞之由心弁中云是もさもゆらん心八時

風の心なくみ流ありのまきるにびのひて我候とぬし

おれとまよとまれ只誇と感とと後とれとせり極みそみし

ゆらゆら山水ととて感とんしゆらするの人とも面紅と互

十て思とん事とと意の心よわゆかへつとんとそ定とゆ

十四番

左 勝 彦 義 家 朝 臣

つ月文に注よ心とつをらん我とすとをんつあとしよなり

右 彦 信 朝 臣

池もなくまよ成りことのもやすみととびりこさらありん

心りつと中一云石弁一云殊歌は

左方中一云墨繪ととびりともつととるなりとをいつしつふ

へつとままよ成りともつとつとぬりつと

判云左心の墨繪せりつとふれ海の子もまあつとれともた

の池もなくととびりともまうつとてつとををゆう人つ

こたらむららんと那とも殊亦不被成まうやを我とすと

念もなとつとそへつとれもれりつとんととれなりつと

本立とつとまよとつとつとつとつと

十五番

左 勝 彦 宗 朝 臣

思ひあまの心につとつとつとつとつとつとつとつとつと

右 彦 隆

書つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

た方一云た身一可歌一事

た方一云た身一可歌一

割之亦亦蓋品一云一也このつてせむれ一とてたてつと

のう人ゆもふとらひのむ一のなり一云一云とく女良

花とうきておとこはけけとらうらとばれ一人と云と

見くともみしゆりゆも又たまたた一とて約め連

十六番

左 持

栗種つ

人と連をけくすむハクひうさまらやとにけけけけらん

右

中宮隆大夫

いさくらも秘兩人と云一まてみそふ雲のなりゆあふせん

た方一云た身一可歌一

た方一云た身一可歌一

割之右の云や論ふけれと云たのいさくらも秘は神回

鳴りらるし

十七番

左 持

女扇

まきつし見うらしりるらん姿中人のけけとて一契とそとる

右

経家郷

ふい事一似ても書らんとけくしり論中もむをうつ一けくす

た方一云た身一可歌一

た方一云た身一可歌一

判云た身一可歌一

らん由然ありけふ約と愚管不足燈ゆり身一持を優け

うたよめしられしや心身そ病氣あゆ由たふ令し一凡
あけらのゆまやさやうの詞此字もて感てともなふあり
あけくくや但似てやゆくらんふと云致不足成會一た乃
ふを鏡あめ人勝も志ゆるん子細不分的之間勝負孰安

十八番

た

既昭

つとれ胸やとつとれ思ひとし人乃一人こそ書うつしゆら

右 膝

信宅

つふせん急よゆくのつとよあつ孫もはこしすくもれ人ひ我

た方一云た身一行事ゆら

陳之長兼隣女と艶して急うつてて逆うら事也

たか中一云心身一重括歌

判念反骨やとつとれ思とし人のう人ゆそと云はばふ系ふ

つとくしゆれ程りた方の陳の詞より孫あけゆらなく

た月之ゆ進大方もかやうれ事そ其書籍の文ふり人既

たしあつらうより且ハ情免れ程もさあしてたうくもゆ

たこまは只長兼隣女と艶して踏よ書て逆うら事ひらと

たうりまゆられも善世の三史ぬとのわしとさきくと紙を

又陽唐の韻おとの人乃名おもも物ともた月思ゆらぬと

管見の考計中つとく長兼隣乃人ありとた不此ゆら

ゆう人に山あのみもゆや叶てもあをゆらぬまやたハ論

ふゆくつとやをゆらうのゆら様よ辱とさあをゆれと

ゆしとすくなさふとさぬ山傍の言ゆれややも康より

さすちのく思ふゆらうられて心勝と中へまよやとそ

為給し申も夏祓樂之事その條より一傳ふるべしされ
と書りて分的すしを少したるにしなりとそ書ゆりし
又後にも筆集なり祓樂のし定て書て傳らんをより
おひまをそあら志連れ人なりと書て傳めりとの陳状
小夏祓樂の書りかしらると一切て傳めりむを證按
尸書りしとけり若以今案尸書をわれたため極て可き恐事
なりと一柳新簡仕たれことめ傳めあの一志やう
小已勿福う一傳てし先川社と押して打りくくを云
事そのひの事なりけり分川のやうと云事不可證分傳も
りやうとん一不可因但川社のまをふつめくくを
志けりなりむは川社と志めり一と云事志けりな
かたと云れあうま詞けり新筆集ふと申も後傳りひてゆり

れまそくと云又回事や初と長七日ひすとソ人伝そ久
ひぬりのといふたあし七日とも八日とも云又云此
や長とまハ傳りとのうらもまを新さぬなり伝り
小似るうといひるるまをのしゆの流の流と伊勢の
なれ山崎の流ありを流と云又布ひきの流と云長なり
事なり流と今夏祓樂の書りて云れそ四の流に後にも
の書たれ流も流と云のといふ詞に付て志のと欄
つきて祓儀と弁備するるとりひ長ハゆれなり心也
なりいゆるゆりし一殊むなり祓樂の家より流たろ
ゆのゆるん定てを證按惟小ゆるんむの流定あへと
事なりへ一と今志らるもと川社にけり
るのて流も流と云と祓儀る遺恨およりゆの連た事

を親みのくちも成せしめてもと云はれうらまうせう事也
たかかれば御授と承りらん程もえい心勝とす人し
廿番

左 勝

五家朝臣

最上しての巻をうひるまはる衣振もうらまのりさねけりりれ

右

信宅

ゆり人の愛いづくたひらあゆらんのをまうひるまはる衣振

ぬ方手不取中

判云んふせよ地を甲斐のまはる衣とをゆりれとめて心を

ゆり人のとせりり又字ゆりゆそをまをゆりやた最段て

と云れりり下白もよろしくすもゆりやたを以可る勝也

廿一番

左

女房

うらとけて後小衣とりさねはゆりのたろ林も扱ありまゆと

右 勝

経家郷

おのひりひゆり扱は床のあまけにカレちる衣うす人もりれ

たせまた舞下白心尋く

た方一云心舞一雲扱取

割云々ありのゆりねも扱ありまゆと云はれ上白り叶て

志もさうそをた流も不可成まうやた力のちる衣優り

ささるゆりや可る勝

廿二番

右 持

五家朝臣

意うり思ひのつたはまそく建力ゆりむ春の荒のくちとて

右

中宮隆太夫

あさうとしろのうつりまをうと衣意をましくむら妻由そまを
心方や一ま左身一心罰せう一不分明

右身一云心身一平懐之上すくひり不耳心

判云左身一花乃改てふとを艶なる様よゆ進えそうれり

りんれりやもひもられをゆへし心身一うと衣内戸り

うまげりぬとを懐みかしゆるとそのうつれ香をくむれ

はくとすふうさあしゆとや膝履不分明拍ふと可や

廿二番

左 勝

兼宗朝臣

ゆつにこう愛もみゆらめ所執衣り色ををあさま思らうとけり

右

深達

着流すをうまこの程ハゆとらも起すも程や人と進ぬらひ

心方一云左身一心罰せう一

右身一云心身一ゆらまう伊り

判云心方のゆとらも左ゆらも右の罰ふあ進と始しゆら

みしそとどりうをきあしゆらふさゆれと衣の心ハあさ

りうさぬくし心そりゆすも程やふとをれを懐よゆと心

もゆしに不分明や心心ゆし付て左勝とまををや

廿四番

左 勝

季禮つ

唐あ井のや一羽のふらもえあうやふとあまのちらふつとじら

右

隆信朝臣

きぬく小結一又をあさるれとむら心さとのぬりらまを

たむかひし云々しつあぬれや一不と云文字ぬのこもくやた
のちもをいし

陳云しつふ細とせしつ事一唐藍の漆さふびんを
のらといふんるたのこつしあつむ

たふし云云舞しむしあやぢゆきとりひあつてもあれす
心う深き忍りちを望のほくきりうりあをすや

判云えし初は唐の井のやときれう懐けしもあつてされと
紅ゆしあをへしつをのちとらん不及新ぬ心初より

ひるほといふるまをこのゆもらすはあしつかすすぢ
既句のせもらまをいゆしつてれくさうひらつし

あ井は勝つふししつう約め連
廿五番 寄席戀

右の持 狂詔

およげくちのよとのあむしろ小独祿してやもつ成ゆれし
右 経家郷

あや遠じらうか人そあえともあつましみのとむてようまを
た心はゆき戯氣之由し

判云た言いでしきるととけりあくろねとらのつてし
きる池のさむし流小独祿とてゆ女の舞しはるも下下に

人わろくまらぬ又れとあの新しはるも女は出まきり池
よへしつるやつりあも初の新字は不直よやゆらと云

あやひしり五喜人をかたれしつと云はあ連もせの舞し
とそみしつるたのぬしよ連石のあつましせしつりお氣を
つやゆきとくし

七 晴 ぬ 澄

いとりの縁の床乃さびちろ栲小たり候も神にうまれのいし
たるし云縁し珠よ不耳し

たし云神ようふれありしや
判云ぬ身し縁しさびしりたりなる物り又事すくむ小

さこ物りしとてふもたえうてらふとよま似えれし
ふ身し後ハ神ようふれ物りしと云れありしとてり

ゆりあそきくわのまね様よゆと誇身しめれたるは付て
た可勝しうもゆめ違

廿九番

た 持

女房

人うつとめ違ゆく縁の雨遠よりうぬちりせをらふ秋風

右

孫達

候もをり候候はくさ席ハはくそぬちりも流りさりる
たし云園小杖り發吹らん事いし

たし云心舞し世難
判云ぬ方のりうまの藝膳負不分的そ穿しゆとたの杖因ぬ

のんおの園あふと吹らんおて意ゆくりん縁や
し因ゆりん事し難し不可及也心を涙流るにりて

ほろもぬちりりと云れ上下を難もゆとたの下白り
ぬ塵をもらふ杖因と云れ姿もまさりてゆ先上句を又を

あしねとるそゆ違ふすくむそ指とて人をや
廿番

左 脇

定家朝臣

忘れをふけし神もや氷うし移ぬよの床はおのさむし
亦右

隆信朝臣

かてしうかりし塵も揺りれしひの病うし
反心ししを歌之由

判之をみ移ぬよの床のおはさ居と之段人の神をも思ひや
まろし優よ約アし心寄しきむちろし中よりけりてらり
の流りろしとカし之のめり事ことゆらん床のりしき物
ひりりしくゆりてもさあをゆを以てる勝

一番

右 勝 中宮権大夫

花は分月うしとひてあく身よひらまろものめりゆりゆる

右 勝

中宮権大夫

波の上ふくしを小舟れむぬりて月ふうとひし妹うさ

心し云方持女のひゆりすまると

陳云い言持女持声承ふちりし他とる也

たし云心寄しを可し与

判之をみ移ぬよの床のおはさ居と之段人の神をも思ひや

まろし優よ約アし心寄しきむちろし中よりけりてらり

の流りろしとカし之のめり事ことゆらん床のりしき物

ひりりしくゆりてもさあをゆを以てる勝

花は分月うしとひてあく身よひらまろものめりゆりゆる

心し云方持女のひゆりすまると

陳云い言持女持声承ふちりし他とる也

たし云心寄しを可し与

の意よりりり可る也晴也

二番

左 持

為宗親長

信比う人みうり建を包凡たも建めも執人よをたのまれぬら

右

隆信朝長

信の上は結不契のてをりも忠よ上はまん力うそりうめ

左心せし一を指取之由

判云云秀の波乃上うりうめを魁の心愜りりし可ぬ指

三番

左

季澄つ

うき舟にひとよとらうらと此契ふふとまうこさ裁力りりうん

右 膳 下 左 心 せ し 一 を 指 取 之 由

注とるれうき舟と忠よめ凡たあも思へもあさま振りりなるを

心せし一を指取之由

左 心 せ し 一 を 指 取 之 由

ひとくろし一を指取之由

判云云秀の波乃上うりうめを魁の心愜りりし可ぬ指

又かとりはほこしと覚ゆる事一め凡た子又云何の程の先

望朝御より孫女等しとせり不用事一後人又注とるま

うき舟と忠よといふるもゆふらよとしようまをいれ

ゆふらよの契ふありゆふらよといふるもゆふらよといふるも

四番

左 持

為宗朝長

ゆふらよの契ふありゆふらよといふるもゆふらよといふるも

見事てまされと一なるくや

七番 奇傀偶意

左

既昭

帆りらあさけりともさぬあしとんちの心や我うなひくせ

右 膳

経家婦

うく山去う心やうれらんうまうまぬはひ衣うれ

たあ一云を拵取

判云山石の去反のぬさをせん我おるひをむしりひ心

鏡山じうつりていうさうまぬ拵衣ふと各よせあり去

む小ぬとせれたるまうりてるもぬあをせんふとまひ

と連れま似てもゆとあさありとをふとまよりう

とゆもや心の鏡山もえはれう事うてふはうりおる

會一仍以心可る膳

八番

左

益宗翁長

ひゆくろれ拵袖のなましくもいとくみややうひしうり

右 膳

信宅

はらやうろひと兼りりの渠ふさうさうあう人もあや世縁

た方一云た兼一傀偶云意ひり

たあ一云心兼一傀偶あ

則云ぬあを意のひるまうり一人各一てゆめりうし

いゆ建も傀偶の心ハの拵てううさゆふめ心姿宜くゆ

うやまうれと一をくや

九番

八番 厄

素直つ

うりきめ凡うりきめあつてくぢやうしことら子歌さきもすうり

右 勝

中宮権大夫い

東流やゆきこの人おうちとけてややうりとうめい樂の可し

たやーまな身一秘秘下之身

たやーまな身たりのりま

判云た身一まもりのきめとくーりふあ連うそゆなまま

のすーりーもうゆふことくーくさくしゆとよふを優

みゆふしふた可の勝

十番

八番 左 勝

定家朝臣

いと救うすれこの中れくまきくびをいぢりる人の契と

七番 厄

素直

根へまうくよう那たれ東流の野りまこれ下のきこのそ

一た方やーま一扱うすすふくー又ま句のそま行

たやーまな身一強秘秘

十判云たりのまれ里志野上乃いふびとひすてまるとりのひき

即このむけとまれせ心こりまてハゆと志の上句根連ま

くくうかふんと云れゆりに濃ろみりゆらぬくく乃

をなとなくもや根もせん手即いもいふかゆさんとくう

すうめ上下うかもまらまやたをれ字不震なり可勝まや

十一番

右 指

五家朝臣

東流やうゆの西乃物あうおさわりのぬらん神そののく

右 隆信朝臣

さぬくはうのれあゝろも鏡山うけみぬ人成てゆう物うし

十七番 左 兼一 直さぬ

たーまぬ兼一を括弧

判云ぬ方てよ傀儡と思やまろ兼一なるてし神もとのりし

らふれ物うもかこり人れをうて詞答れりかろあるよ

あゝあぬへし仍る括

十二番

左 持

女房

一抱りてぬとのか人の契とておびをいそくさまうくうれ

右 兼一 直さぬ

びをいらん契もつろーま拙まろたぬの辱のたのみそ

左 兼一 直さぬ 傀儡の心曲也

判云左心の草摺傀儡の心曲也 出りらり方人各一云と

九番 左 兼一 直さぬ

びをいそくとつひ心の契もほりかこり人れを傀儡有る

兼一 直さぬ

十三番 兼一 直さぬ

左 兼一

女房

志不届の喚えぬのたれをぬいそー下に思ひのやゆら比うれ

右

中宮権大主

みれこ掛けうらり崎ふあさとする登もみるゆえれ求ると

たぬらもよま括弧之由一之

判云左兼一 喚あすあれとぬいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

右新し居所を并に残りの勝りもその川のほとりへ
因許の各約めまじり方極殊まろしくみしゆり可の勝

十四番

左 勝

兼宗朝臣

我意をわかれあうて成うりかたしとてきてや世縁も根ふん

右

経家郷

衣をきかやうと生とも思ふめともしつらぬあふと成小るは

七パーちあふのあうて多異説多事や澄よひとく海

人ふんあうめよめいり

たパーちあふ可パー之事

判云んあふのさうく澄可成業にぬと海人およめらん

小をきても何報りあらんや道來人と異説云くをを理え

愚むくは澄る小後てゆしうれを報する由小ゆむ伊勢

物種の外ことなる澄按りのれ了し但ま合の時望のあう

て宜哉中をされ了し衣てハ志がふれてみるめさうつ

のさうらん望とならん事を用ひくやさハ澄りあふゆと

あうされくしたさうてき優なりあれを海人も可る勝

十五番

左

延昭

康福様あまのまくりことなる祿を成れうめさうつとさうり

右 勝

お澄

思ふもきたらひりるへまのせりあまの人と根ぬ神をぬれり

たパーちあまのまくりことまを明ことと説ありきとゆり

やう小定られりゆり

陳玄白の事と存て御せり也後撰并てとくや即よ色共
いとけることいふもややくことうかかぬり又百葉集
伊勢神祇書中も志がやくいとすなりとよめり又新古今
此方にもくこといふ所のうさばくも彦根とともなふも
うれも千和泉或る舞を伊勢の海のおまのあまのこの
まをりこよれまやえらんはのたきと後撰うまやま
うれをいふれあまたのとこれに臨やくむりゆれしあま
もくくこといふれ中も志又新古今山へる新古今集も
是ての記すへり又志や後とさうり也りこり臨
やく事やま又陳玄白の海に後やく事とくよゆく
也こそ書出民も志の中なり又是てはすれあの中よあま
とみておたりまこといふやまのうれ人まのあま

志記云うれはまを中りうまの志記云うれはまを中り
つと後撰りれといやんはこと記すうり
反中云志記を指物もや
判云志記を指物もくこと後撰うり人の志のうめさゆり
なりとたりと志記下白の優りも志記さるへしは志記
志記志記へまよ及もいれへき事也但後撰英明物志記
あまのまをこといふも志記とらめれ也志記志記
崇徳院の志記のし町あまのもの志記志記と志記志記
志記志記の志記志記志記志記志記志記志記志記志記
也志記志記志記志記志記志記志記志記志記志記志記
いふんや志記志記志記志記志記志記志記志記志記志記
後撰志記志記志記志記志記志記志記志記志記志記志記

く加橋にうりゆへたるけしとす少くを事しせり
めえは事しはるのためかれためを要りくゆ事とやんそ
まきかとも望りうりよささうハゆ事るれ五并一可ぬ助
十七番

左 指

左 家朝臣

たもよやも釣すらえれ登成みん枕のちこころう場ふとこ

右

信宅

た不ぬ珍く神一表の深まうりひふうりふあまのつりあ孫

た心ほ不執一

判云た并一うそくやも釣すらえりたあ片とみんとりひ心

并一ひる一うりぬあまの釣弁さう一ひもあうく詞もれ

うりくさあして膝肩已極分仍ぬ指

十八番

左 指

左 家朝臣

神うりたを一まのあ片も望りどん不さぬたぐひお思ひる取

右

左 信朝臣

まどのと志たのうさ馬うさとのそのたしも似る神の波水

左心せ一不慮之由

割云あ番又を直思ゆ一まのあ片も伊さりせんとりひ

たこばうさ馬うさとのとあとえれた右の神代氣袋共勢

ふさこも又可ぬ指

十九番

左 家朝臣

左 膝

女房

意流とまの波やそらそふ物夕よ若り志を舟けりつるまとも

右 中宮権六丈

兩紫の志は中もあつぬまはれとも意中人我も歎とそはむ

右 右を望新之由

判云右身の内所をみるをくはなとてあかへつらんぞ

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

右 右身の内所をみるをくはなとてあかへつらんぞ

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

右 右

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

右 一番

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

右 勝

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

又あえゆ連と鄭太銚り漢のる思ひやう連を候よ約し

別之深山よ世少志のを介げきとあるとしよう可きところぬ
と云れよと如何しじい介げきとあるのみの本とある
と云ひよや思そ我もことぬ人しと云れもあしひす
しと云れよと如何しじい介げきとあるのみの本とある

廿二番

左 勝

右 勝

と云れよと如何しじい介げきとあるのみの本とある
と云ひよや思そ我もことぬ人しと云れもあしひす
しと云れよと如何しじい介げきとあるのみの本とある

右

隠信朝臣

浅きや心と云れ山人も方よ抑よほとけなりきとこそこれ
左心せりしりしと云れ山人も方よ抑よほとけなりきとこそこれ

判云左心せりしりしと云れ山人も方よ抑よほとけなりきとこそこれ

判云左心せりしりしと云れ山人も方よ抑よほとけなりきとこそこれ

おれん程なくあまわれりひれ目せと云うおとあそ
ゆりや左心可る勝

廿三番

左 指

右 左 朝臣

我意いさけささし山のや海人も心と云うおとあそ

右

舞道

秋のて風木こり流む山人もゆりひの程と云うおとあそ
心と云れよと如何しじい介げきとあるのみの本とある

判云左心せりしりしと云れ山人も方よ抑よほとけなりきとこそこれ

判云左心せりしりしと云れ山人も方よ抑よほとけなりきとこそこれ

判云左心せりしりしと云れ山人も方よ抑よほとけなりきとこそこれ

廿四番

左 勝

定家朝臣

山深さおけきある杉のをれまのきくくく海とふさ乃が引

右

お澄

山人のりるに家法を思ふ中も逢ぬ那けきうやとむ戸もま

た右より不難し

判された道路のいゆりてお人しし石段家法逢ぬ致なりとい

い豊ぬりや左橋とましくや

廿五番

寄商人戀

左

歌昭

逢うめて後ハ志のまの市もてもようのちきうじとそ思ふ

右 勝

隆信朝臣

あはれありの小三輪の市もせき今ふりふれをゆりありや

た方より云た新下敷をせ下りうりつけらる

左より云た新を指極めしりふれをりい

判云のひうめてとりひ志のまの市敷りれりちなとそを

きてハすゆりのふかしの市も念にかつらう像成極小

ゆと三輪北市小長じをやふとこれもぬるまわしあ

比月くをまのりひ成りひくびとすう命を詞成さ

を詞とふふハ心悩むを染とち連り新しきう類を

そくを定まれ既習やた云ま句直くを志勝とす人し

廿六番

右 勝

通家朝臣

あしこり逢ししつるん市もつれつれるまればいよん

右

信宅

あま人のあはれをとりよ中もうとんとあつは涙なりたるを
右きりて左に高人市をこりて

たかきりてあま人の舟きり出ると醒醒列と

判云た舟にた舟程といらありてあま人はやちこ意と

小舟中つんとり別あま人もあからんをり別あま

人のあへりりれとやち舟に又左方取ら舟きり出ると

醒醒列とらとをて詞難似る奥を心又も戯氣を如何又

高客の舟をと思お婦人ひとをきりあもり但醒醒列の

言と思とらとも尚町をのひ不分的た舟舟と勝りや約は

廿七番

左 勝

素直つ

や海とぬやのふれ市めふ事回ん遊よつらとりくつふつと

廿七

経家郷

はうくくをいらめもゆようなげをうめびをりて思ひ多

たふ市め不可産芽之由なり之

判云あ方の市女風神降て芽勝負た市女もさうと云は行

事とかけくともやちさたまや左のふれ市女とく

志げあそ約と遊うつとさやちと云れさも産とさく

たの勝とくし

廿八番

左

定家朝臣

たらの市や目と待賤のうれまうけひをわちよとてあま

右 勝

中宮権大夫

むりあ人の市路よ五人そらひふいれりとかつんとやま

右方中一云尻弁一箇名不耳心

左方中一云春阿人作くりす

判云尻弁一云中一与首名不耳心云々

右弁一又ひりりの人作くりすと云々但尻をそまはし

やとのひりるそのあをそまはしなと云れ事一そりさうり接し

ゆと右も意し命をとされ此より接し約一以心る勝

廿九番

左勝

左家朝臣

しそまても意し三揚の市あり約りふとの上立もそり

右

鎌達

さそ倦てせよあるるそそり流せ輕波此方のうをいそみん

右方中一云尻弁一箇名不耳心

左方中一云心あかり

判云尻も意し三揚の市あり云れハ優なりと下句後于なり

しや心教波の芦うれれとあふ人小りわてりすりるゆ小

や控方のとりれ市勝と一りるや

廿番

左

女房

年ありまへ江の杖の月とそもあ抑りまぬ人やのあ

右勝

家澄

ともすれをあそりる波の上にりるあす秘とも人もいり

あ羅羅列せ揚教之由と一

判云左心の羅羅列右はと一抑のさりとをけりるそより一さ

と別抑一ぬぬといるるわとそりしはりり接りりう人み

いそぎし陽江と花のひさしをうらまをのりぬ
なくゆりんたハ別とちぬといぬり人まやひたりと
まはいさくの人のやまぬいとのあけりうし仍たの勝

別若入る判書ノ奥より出付て云

後長乃松もあまきとけやとん八十包のうわのれうし

たの軍の出事云

抑方北浦のちるへとるれれむ乃波り不後長の松もきくらん

た大將家六百番歟合巻才八終

寛永十七年九月吉辰

110X
355
8